

ウェブコラム② 翻訳の失敗

逆選択の原語は adverse selection であり、元来は保険用語として使われていた。つまり、保険市場では保険会社から見て契約者のリスクに関する情報は十分ではなく、結果として高リスクの契約者が残り、低リスクの契約者は残らない。本文で述べた中古車市場と似た現象が起こるのである。このような意味を理解するためには、一般に広まっている逆選択という訳語よりも「逆淘汰」のほうが理解しやすい。著者の1人は、初めて逆選択という言葉を学んだとき、誰が選択しているのか悩んだ記憶がある。逆淘汰で習っていれば、そのような悩みとは無縁であったろう。

ただし、逆淘汰は優生学において dysgenics (劣生学) の訳として使用されることがある。優生学の逆淘汰は、社会の弱者保護が人類の遺伝的改良を阻んでいるという意味で用いられ、歴史上の経緯もあって評判がよくない。単純に用語の重なりを避けたのか、優生学の悪評をおそれたのかは判然としないが、結果として逆選択の使用が多数派を形成した。最近、逆選択の代わりに逆選抜という語を用いることが多くなっているのは穏当な解決法と考えられるが、adverse selection の本来の意味に近い訳語が依然として逆淘汰であることは疑いの余地がない。

もっとひどい翻訳の失敗がある。当初、モラル・ハザードは「道徳的危険」と直訳されたが、その後、曲解されて「倫理崩壊」と訳されるようになった。そこで強調されることは、他者を顧みない自分勝手な行動への戒めである。しかし、モラル・ハザードの本来の示唆はそのようなものではない。モラル・ハザードとは、保険によってリスクに対する保障が期待できる状況では、人々がリスク回避行動に努めることを怠ってしまうことを意味する。たとえば、自動車事故の保険によって守られていると、自動車の運転が乱暴になってしまうということである。そこで強調されることは、保険によるインセンティブの変化であり、そこから生じるリスクの変化なのである。このような誤訳は国立国語研究所の言い換え提案によって容認される方向にあるが、海外とのコミュニケーションを阻害するという意味で望ましくない。